

三峯紀行上

三峯紀行下

廿日昇^{アソク}起^{アキ}地上霜白^{アサ}下^{アサ}寒衣^{アサ}微^{アサ}す出^{アサ}く山^{アサ}
一^{アサ}觀^{アサ}院^{アサ}の前^{アサ}仙堂^{アサ}あり宇^{アサ}接^{アサ}す主^{アサ}乃^{アサ}旦^{アサ}暮^{アサ}勤^{アサ}行^{アサ}の
所^{アサ}院^{アサ}の背^{アサ}龍^{アサ}鐘樓^{アサ}あり是^{アサ}分^{アサ}東北^{アサ}に連^{アサ}り又^{アサ}一^{アサ}
峯^{アサ}得^{アサ}此^{アサ}を本^{アサ}宮^{アサ}乃^{アサ}てを四月^{アサ}朔^{アサ}分^{アサ}人^{アサ}聲^{アサ}をが
得^{アサ}總^{アサ}く山^{アサ}頂^{アサ}踞^{アサ}と里^{アサ}事^{アサ}と此^{アサ}師^{アサ}を真^{アサ}の英^{アサ}靈^{アサ}乃^{アサ}
居^{アサ}す恨^{アサ}時^{アサ}を及^{アサ}いさるを下^{アサ}くた^{アサ}院^{アサ}を此^{アサ}列^{アサ}
室^{アサ}あり庭^{アサ}中^{アサ}に間^{アサ}のをもととも要^{アサ}夫^{アサ}白^{アサ}雪^{アサ}の長^{アサ}
眠^{アサ}中^{アサ}の物^{アサ}想^{アサ}ふて旦^{アサ}夕^{アサ}の主^{アサ}和^{アサ}歌^{アサ}好^{アサ}と則^{アサ}如^{アサ}故^{アサ}に
誘^{アサ}ひさるの徒^{アサ}非^{アサ}願^{アサ}。遺^{アサ}憾^{アサ}を解^{アサ}がし已^{アサ}り

三峯上



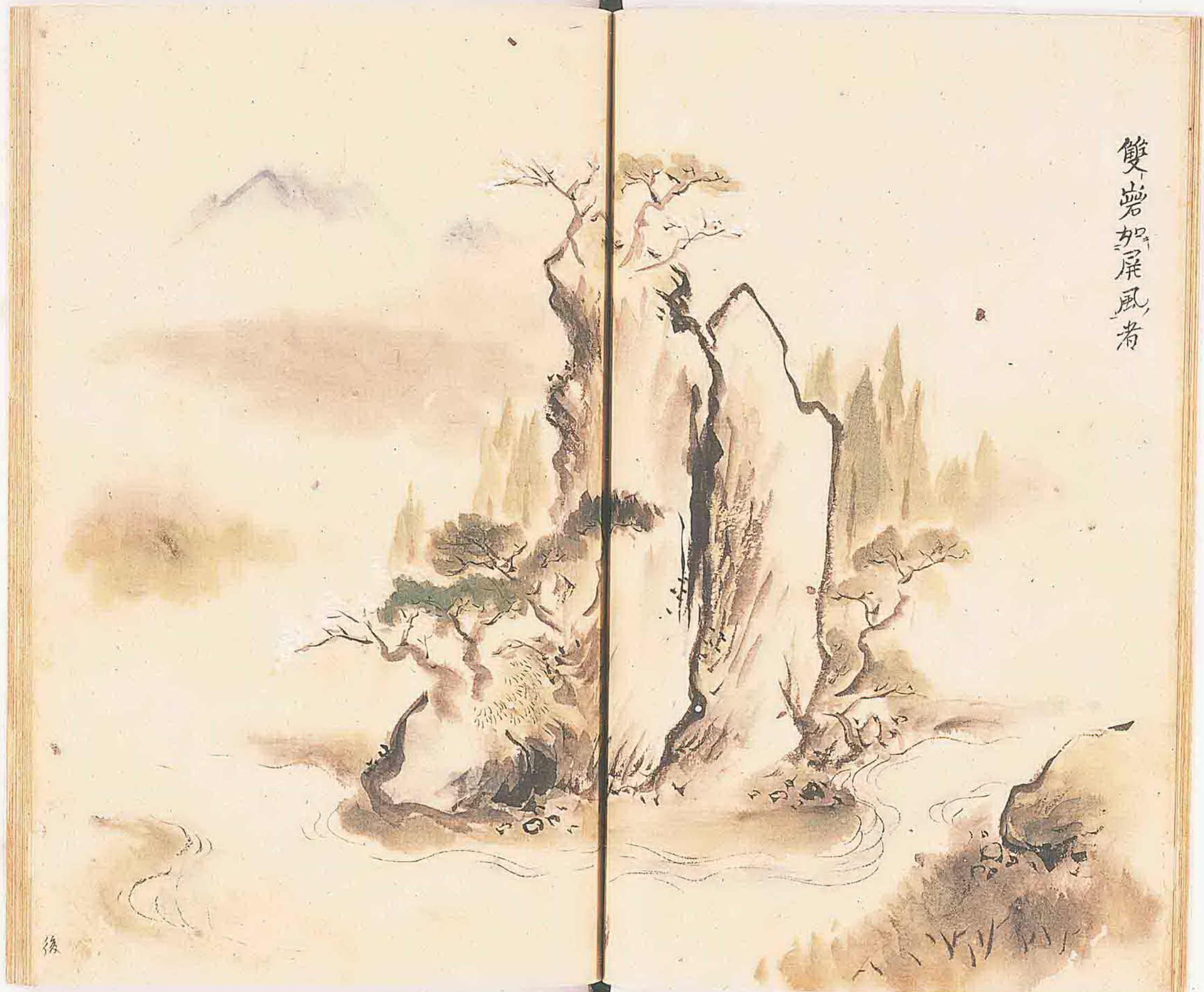
院亦辭其堅牢は固飯盛り之贈各四箇宿願
萬徳人ども皆なり亦夥なるを夫米塩のとき此際
必是きを取舟車を牛馬を親而此水の如す
其財の費亦知無き已人種の之所に水のこと予
然るといふ然而予是を信する神の爲に夫
名山の外著明の徳なり人境去き清塵了
超然其秀氣の精鍾る亦威儼然正靈聖
衆人といふ不捨の故起さしむ以之傳曰名山
巔雲出朝紫すく暮下而是神の福なり
と故天子に立極を禪満座を方嶽を奉以威

承明めとて士庶従く仰く而威灵滋遐矣今
吾土諸靈山多汚穢の佛を毘其威なりを類
者主祠者の罪とて元祈者の神黷かすれり蓋
信と不信と財ありも信曰苟明信あり則諸
靈靈藻藻之菜鬼神薦べくと申土山川の神紙
幣用亦其志達而已神豈富以崇とせん乎山室
郊外以尊とせん乎予聊神の爲に寛發す已下
志滿ふけり而朝氣堪うんといふ思ひ喘ききく
とけす僕と相弁たすことと一時かき瀑所
到る微汗乾く乃入或曰中かする時盤溜溪

故に涯^ハとして瀑下^ニ就^ス——と即^ニ之^ヲ從^ヒ其^ノ流^ニ列^ニ肌膚^ニ。
微^ニ氣^ヲ吐^キ体^ヲ痿^スす言^ハ企^ニ欲^ス能^ハと^テ役^ニ道^ニ者^ハ三人
共^ニみする何^レ共^ニ烟^ニ一^ニ管^ニの際^ニ當^ル者^ハも——其中^ニ唯^ニ一人
塊^ニゆきと^ハ得^ルあり是^レ諸^ノ瀑^ニ當^ル者^ハと^テ予^ニ之^ヲ次^ニと^ハ
得^ル——僕^ハ怖^ルる瀑^ニ下^ニみ至^ル者^ハ猶^モ首^ヲ纒^リ下^ニり如^ク——皆
笑^フ予^ニ淺^キ下^ニ就^ス故^ニ浮^リ沈^ミ——續^ニ興^ニ——餘^ノ勇^ヲと示^ス
人^ハ亦^モ好事^ヲ哂^リ概^シ川^ニみ至^リ快^ク命^ヲ——若^シ米^ハ日向^ニ村^ニ
至^ル右^ノ崖^ノ下^ニ流^ス吏^ハ順^ニ礼^ニ一行^ハ數^ニ十^ニ人^ニ隔^リ其^ノ法^ニ三人
長^シ竿^ヲ持^テ肩^ヲ丈^ニ此^ノ間^ニ連^テ立^ス皆^ハ竿^ヲ載^リ長^シ竿^ノ之^ヲ貫^キ
遂^ニ其^ノ之^ヲ——一^ニ串^ニ乃^チ米^ハ園^ニ子^ハ水^ニか漂^リと——歸^ス

者^ハ皆^ハ嘆^キ上^ニ田^ノ野^ノ邑^ハ右^ノ山^ニみ入^リ七八^ノ町^ニ——第^ニ廿^ニ八^ニ
馬^ハ疾^ク觀^ス音^ハなり堂^ニ宇^ハ坐^ス小^ノ但^ニ堂^ノ上^ニの峭^ニ壁^ニ奇^ニ甚^ニ——
是^レ一^ニ巨^ノ塊^ノの石^ハ骨^ニ之^ヲ濫^ニ貫^ス白^ニ理^ニ縫^ニ合^スの^ヲ見^ス其^ノ高^ニ
數^ニ仞^ニ其^ノ後^ニ數^ニ丈^ニ品^ハ我^ハ堂^ニ前^ニ數^ニ十^ニ步^ニの外^ニ——
其^ノ其^ノ峰^ニ望^ミむ^ル者^ハ予^ハ趨^リ——過^リ是^レ而^テ東^ニ
西^ニ覆^ス洞^ノ天^ノけり尊^ニ者^ハ備^フ予^ニ之^ヲ各^ニ一^ニ布^ヲ衣^ヲゆと^ハ
是^レ衣^ハ北^ニずる^ヲ備^フと^ハ而^テ之^ヲ被^リ尊^者獨^ニ把^リ——行^キ其^ノ口^ニ
来^リ跡^ハの九^ノ崖^ニみ何^レ已^ミ——臨^メ口^ニ纒^リ二^ニ尺^ニ許^ニ一^ニ人
倚^リ——る座^ニ——磬^ノ州^ニて行^キ數^ニ十^ニ步^ニ下^リ階^ノ何^レの
術^ハ廣^ク九^ノ州^ニ上^リと^ハ三十^ニ步^ニの穴^ニと^ハ——下^リ

雙岩如屏風者



右盤曲、階降、或廣或隘、或上或懸崖あり
或下或幽谷、何り導者燭、振々示す、火燄黒火、
不及其底、知つるず、大か端、栗も益、あす奔泉
頭、み滴り、蝙蝠面、み遮る、俄か上る、窟室、白と生
ず、るるとき、益、益、益、終、み出、つ、則、堂の
右腹、なり、凡、洞中、尤、石、岩、後、凹凸、碑、石、物の、象、と
作、ぐと、或、あり、尽、く、名、く、ま、仏、と、い、く、麓、大、地、獄、極
樂、乃、説、と、爲、す、秋、氏、乃、証、此、み、到、る、常、と、い、其、之、に
繪、島、の、仏、道、み、比、す、れ、稍、ゆ、れ、りと、す、然、酒、落、る
一、神、洞、み、く、已、既、出、の、汚、名、ゆ、之、強、者、の、潔、と、せ、ど

山、在、り、く、行、と、十三、町、大、宮、駅、乃、南、み、出、吊、或、中、の
坎、の、麓、之、又、一、觀、音、み、清、す、第、此、み、あ、る、寺、則、或、甲、み
松、者、なり、階、と、二、町、洋、み、く、小、堂、又、一、町、み、く
岩、後、の中、み、方、丈、乃、坦、然、と、る、許、何、り、是、秋、又、大、土、場
前、建、の、と、り、三、上、人、知、事、と、論、と、る、下、に、稱、く、御
相、談、場、と、云、住、僧、室、み、坐、く、之、況、且、募、化、す、辨、甚
予、囊、錢、八、枚、出、り、而、更、少、なり、爲、か、他、の、在、る、み
猶、襍、せ、の、く、投、す、僧、便、此、之、識、大、か、以、張、く、曰、堂
堵、建、立、の、奉、讃、錢、八、孔、先、祖、德、具、編、現、當、家、内、み
穩、南、无、慈、眼、視、衆、生、と、出、く、僧、み、清、く、曰、彼、僧、ハ、點、

者^ハ一^ニ士^ヲと^シて^ハ八^ノ銭^ノ下^ニ辱^スめ^ル一^ニ然^ル者^ハ
圓^ノ通^ノの^ハ降^リ斜^ニ輸^マス^ル一^ニ當^ルと^シて^ハ僕^ノ予^ハ責^メ曰^ク是^レ公^ノ
の^ハ達^ス者^ハ之^レを^ハ給^フか^ハ授^ケず^ルを^ハさ^スる^ハハ^ハ銭^ノの^ハ念^ハ彼^ノ力^ヲ
亦^ハ昔^ノの^ハ次^ノ乎^ハ何^ノの^ハ辱^ム之^ノ受^ケん^トと^ハ亦^ハ其^ノ笑^ヲ乃^ハ賦^ス
出^デ館^ニか^ハば^ハ日^ノ下^ニ卷^セむ^リ

廿^ニ日^ノ三^ノ年^ヲ一^ニく^ニ發^スす^ル主^ノ人^ハ返^リ館^ニ乃^ハ前^ノ沢^ノの^ハ狭^ニ斜^ニ
み^ハ入^リた^ニ所^ニを^ハう^ニ道^ノ右^ノ第^ノ十五^ノの^ハ寺^ノの^ハ主^ノ人^ハと^シて^ハ一^ニ拜^ス
を^ハる^ハ百^ノ歩^ヲみ^ハく^ニ妙^ノ見^ノの^ハ堂^ノの^ハ境^ノ内^ニ隆^ニの^ハ門^ノ前^ニ長^ノ木^ヲ
表^ヲと^シて^ハ立^ツ曰^ク不^レ許^ス汚^ニ穢^ニ之^ノ者^ハ而^ハ毎^ニ禁^ス忠^ニ孝^ニ之^ノ徒^ハ意^ハ輒^ニ笑^ス
て^ハ出^ルた^ス龍^ノ之^ノ階^ノ屋^ヲ上^ニ第^ノ十一^ノの^ハ寺^ノの^ハ主^ノ人^ハと^シて^ハ一^ニ拜^ス

聖^ノ人^ノの^ハ像^ノの^ハ甚^ニ古^ニ物^ヲ一^ニく^ニ刀^ノ痕^ノ凡^ノを^ハさ^スる^ハ一^ニく^ニ作^ス
老^ノと^シて^ハ僧^ノ知^ルも^ハ出^ルて^ハ三^ノ戸^ヲ松^ノ坂^ノ米^ノと^シて^ハ日^ノ坂^ノ上^ニ田^ノ陌^ヲ
九^ノ第^ノ十^ノ科^ノの^ハ路^ノあり^ニ陌^ノ尽^ニ村^ノ柳^ノ生^ルと^シて^ハ日^ノ阿^ノ部^ノ侯^ノの^ハ封^ノ
山^ノ入^リ峽^ノの^ハ虎^ノ崖^ノ長^ノ杉^ノ多^ク一^ニく^ニ旦^ノ下^ニ女^ノ松^ノ見^ルと^シて^ハ現^ニみ^ル竹^ノ乃^ハと^シて^ハ美^ノ材^ノ之^ノ斜^ニた^ニ下^ルた^ス一^ニく^ニ洞^ノ水^ヲ得^ル水^ヲ至^ニ清^ニ向^ニ
岸^ニ雙^ノ石^ノ立^ツ猶^ハ展^ニ風^ノの^ハと^シて^ハ艱^ニ事^ノ子^ノ花^ノ露^ノ半^ノ青^ノ
葉^ノの^ハ樹^ノ而^ハ後^ニ視^ル伏^ス席^ノ作^ス具^ハ後^ニハ^ハ長^ノ杉^ノ真^ニ一^ニく^ニ此^ノ一^ニ冊^ノと^シて^ハ
足^リ況^ハ衆^ノ機^ノ相^ノ當^ルり^ニ武^ノ甲^ノ之^ノが^ハ主^スと^シて^ハと^ハや^ハ久^ノ之^ノを^ハ村^ノ
得^ル芦^ノや^ハ涯^ノと^シて^ハ官^ノ知^ル之^ノ苗^ノ店^ノ就^ニ極^ニ命^ノ不^レ羅^ニ現^ノの^ハ程^ノ阿^ノか^ハ
尚^ハ三^ノ里^ノ半^ノと^シて^ハ出^ル店^ノの^ハ側^ノか^ハ禪^ノ寺^ノの^ハ茂^ノ林^ノ寺^ノと^シて^ハ便^ニ此^ノ最^ノ

第廿八觀音



洞後口

洞前口

より右折^ス向^キの溪^ノ中^ニ右^ニ折^リ一^ノ町^ヲ鎮^シり^テ町^ノと^ハ脱^ス
尚盤^ノ疏^ノ一^ノ行^トと八^ノ町^ノ山^ノ東^ニ在^リ候^ニ^ハ所^ノハ^ハ溪^ノ水^ノ
決^ス此^ノ際^ニ却^リと^ハ峽^ニと^ハ深^ク者^{ナリ}と^ハ人^ノ家^ノ何^レと^ハ也^{ナリ}
山^ノ下^ニ炭^ノ焼^ノ河^ノ幽^ニ竟^ニ思^ハふ^ニ屋^ノ田^ノ中^ニ戸^ノと^ハ得^ル
皆^ノ獵^ノ者^ノ乃^ハ家^ノなり^ニ尚^ニ行^トと^ハ数^ノ町^ノ漸^ニカ^ニ深^クと^ハ高^シ
人^ノ子^ノ道^ノの^ノ河^ノの^ノ秋^ノ又^ノ嶺^ノ乃^ハ麓^ニと^ハ樹^ノ多^ク崎^ニ岬^ニ
甚^ニ一^ノの^ノと^ハ也^{ナリ}之^ノ粥^ノ京^ノカ^ニ比^シず^ルハ^ハ迂^ニ曲^ニ也^{ナリ}
渴^ニと^ハ惟^ニ水^ノの^ノ一^ノ忽^ニ道^ノ在^リ清^ニ漆^ニ得^ルと^ハ則^ニ飽^ニ飲^ニ
又^ニよ^リと^ハ二三^ノ曲^ノ即^ニ嶺^ノの^ノ唐^ノの^ノ就^ニと^ハ午^ノ餽^ノ酌^ノ引^ル
店^ノ改^メ大^ニ豁^ニり^ニ主^ノ人^ノ推^ニ現^ニ山^ノ指^ニ示^ス即^ニ此^ノ也^{ナリ}一^ノ澤^ニ也^{ナリ}

至^ルる^ニ所^ニ程^ノ所^ノの^ノ尚^ニ三^ノ里^ノ鎮^ニと^ハ志^スと^ハ下^ニる^ニ小^ノ村^ノ庄^ニ
た^ハと^ハ官^ノ知^ル又^ニ村^ノと^ハ南^ノ川^ノと^ハ日^ノ谷^ノ峽^ノカ^ニ戸^ノさ^ス者^{ナリ}
溪^ノ流^リ前^ニカ^ニ次^ニ流^リ上^ニ岸^ノ柴^ノと^ハ村^ノ積^ノ者^ノ所^ノカ^ニ在^リ
是^ノ雨^ノと^ハ待^ルと^ハ流^リこ^ト村^ノ長^ノと^ハ居^ルと^ハた^ニ細^ニ路^ニと^ハり^ニ
急^ニカ^ニ流^リ廻^リ撞^ニ現^ニ山^ノの^ノ凡^ノと^ハと^ハ二十^ノ町^ノ餘^ノ樹^ノ多^シ
頂^ノ上^ニ一^ノと^ハ郭^ノ家^ノの^ノ邊^ノの^ノ右^ノ環^ノカ^ニ衆^ノ衆^ノの^ノ所^ノ
念^ニ右^ノと^ハ又^ニ村^ノ入^リ磴^ノ道^ノ上^ニ便^ニ華^ノ表^ノ前^ニの^ノ店^ノカ^ニ鬼^ノ
州^ノ鞋^ノと^ハ更^ニ行^リ李^ノ属^ノせ^ルの^ノ客^ノ至^ル華^ノ表^ノの^ノ店^ノ即^ニ
た^ハ文^ノ山^ノが^ノ隸^スと^ハ飛^ニ動^ニ可^シ喜^ニ外^ノ門^ノの^ノ大^ノ鱗^ノ山^ノ古^ノ文^ノ
ある^ニ者^{ナリ}乃^ハ州^ノなり^ニ佳^ニの^ノカ^ニ似^ルと^ハ石^ノの^ノカ^ニ一^ノと^ハ茶^ノ内^ニ

つり石磴歴々宮之宇堞莊嚴之九門を院
とす大之亦人を病せしむる痛三孝のといと店
歸る時計ふ尚羊なり蓋出くも紫雲近と七
里餘をも詔の主人山宿今和より然れども日尚高程破ミヤコ
と欲僕亦壯なり出く下るも短く村を得中
澤と曰官知中中勝と曰田母卿乃封之路失せり村吏
逢く本途不就く小嶺と越く麓々尽く村原市
場と曰石倉曰又麓を三十町行やと村直作
と曰日已か山宿より頗く驛の所尚きくと疾歩境
見る心なり數問く驛の所尚きと五里と

則病期も者なり而共跡實是く大に欲せし且
尤足の宿痛微スミ奔とら高き三枚氏田の先店を就
青梅の程の二里餘と曰僕も頗く尚壯なり則之
夜も夜せんといふ唯く立く予も亦能く極カに
相ツ躍ツ立ツ店の主曰公等壯なり
夜も及ぶして到るべしと益意得くちと向村之
尽く右轉然る隙地行と七八町村郡足
日盡て野路村中里と曰黒澤と曰日已か黒
物象第餘清路でゆふ尚二嶺二峽を經しと
心か悔とゆひ僕も頗く痛く予の足問予も故跳

距三町一ノ示す已方一ノ山一峽と越、正か
一顧孤霞の中、遠山參差禽鳴、默然凄
第二嶺火繩ヲ振る馬蹄、逐々響く、亦幽情と雖
鶏肋の哉、僕抱る心と此す、不爾、狼心
行かざる日、父君途を、刀、重と可とす、思
一との美ありと、損吏か逢ふ、路を問、右折、峽
み出、大路の、尚在下、事十町、二商人か逢ふ、又
問、曰、是公等、か路、失せり、已、馬に、此、則、此、と、思
一、又、行、話、る、か、其、路、三、夜、氏、と、知、者、十、町、行
か、右、燈、光、と、見、一、高、峰、一、回、此、賊、商、の、家、こ

驚、畏、し、と、公、等、宿、せ、の、話、朝、三、夜、氏、導、せ、を、す
而、し、も、已、か、浴、湯、と、尽、す、故、と、以、敢、く、請、ふ、と、思
到、信、見、又、六、町、か、一、高、の、家、こ、先、か、妻、か、店
頭、御、席、と、改、る、と、息、一、む、茶、火、と、出、す、店、系、小
流、の、微、川、草、葉、鳴、涼、と、引、咽、と、吹、懐、く、月、の、一
已、通、一、老、人、と、す、主、曰、賊、商、か、又、馬、か、ま、る、君、か、高、一
導、せん、と、す、や、乃、導、き、謝、一、と、共、出、丘、と、経、く、院、と、は
傳、す、則、三、夜、氏、の、門、り、う、謝、畢、決、一、く、決、ま、
と、過、主、人、夫、婦、出、迎、慰、留、一、且、只、異、日、話、す、其
大、宮、が、す、と、い、ひ、む、し、と、健、き、と、云、ら、る、の、程、凡

十五里乃内なり。昔亦從ふ遊く。早く寝おけり
時巳か子の初也

廿日丑、是乃萬々主人の墓也。墓より從ふ主人家系
と示す之。墓するは、舊の秘府に丘あり、其の事
の
不林霜君の廟に導す屋後の山霞
なり。唐東向世の墓北並、群々ある家の南
而より南の所即私園こと園より以南、堂と次、舊の
東あり、民家二三十戸、即胎泥村なり。是より東、
南一龍と隔て、青海驛に就、園つるは東北に連り
眺むる限とて、其長九里、其西より河那の最ト

す。正東、長園のこと。是ゆへに正字、族之節、主人席
上の物の端に、主人饌飲と設く僧侶二人と一醫者
と接引す。皆至法徒、法強く之を應とる。乃て大に
厭予、密主人は青梅寺と促已あり。三俗婦、主
人と共に出く、南一小巖あり。神明の祀あり、狀目
下、其貌を、其貌克之、驛南北に長く、凡三四百戸、
者多し。皆瘠、直く又戸毎に寺あり、極能、雪の正し
宮前八角の柱表と建、壺碑に擬する者あり。方とニ
一僧之、説文然あり。又南、虎山、一蓋松を
是、廟松と云ふ。又一旗、棠州の祠あり。又向の

秋葉山

大井邑

玉川

青梅駅

者の廣く 歌の長流、即經水より正練の中紋
 出す者、皆襟袂不毛之以南八九町より妙花村
 より大井と云然に至るに戸を出る者皆山よりと
 花を、謝もと云も、袖尚夥く、清流之環り山之
 擁す人より仙源に疑いむ興あき来り、相檀
 一、相次主人と共に莫逆意を娛し、忽ち晨の僧俗
 共とあり、恒育と提集し、来り難飲し、大なり惡風
 暴おひす亦厭ふ、と共勉強怒り、改か惡客の態
 となり、之に辭其閑より當り、標より主人を丹
 其を衆に調謝し、心々唾し、之と決す主人云

為其却々興を破る事とを懈す山と下り駢然
 東に過りて林を穿たずぬる青梅寺の門前
 田隴の外に師玉水山とて睨む所の者の院後鐘響
 門前鳥鳴薄暮有毎の境人地を行と知む
 此に至る向乃汚穢と脱却しつゝ門金剛寺と
 扁すも梅山号する梅即堂の系に在枝幹を
 巨にありて是蕩の児孫なりと然れども亦玉年
 外乃者なり杖疎方共閑み及ぶる子雲と經
 る處ず熟せむ之に它を植て徳をうとせり
 新と謂ふ碑銘あり金我乃作之此其後

下河得と凡林の下平将門の墓あり海に五ヶ所并々
拂り墓下り物之い見ふ之は徒然草谷街に為すの
予国史雅記と梅とるを将門已に伯父国香と討
其罪通るを乃を以て相馬を偽朝と構
終に上下總武相乃四州を収めり而其敗亡の地
武の且に大骸を神田とし飛首を鳥越とする乃
已に既に矣を説くるに又其墓乃を聞くる時
是軍に信然に知る寺の相馬度と檀越とを云ふ
亦名を街る者ありも予嘗て予偽朝の略乃自史
と見え文哉古雅是逆とを説くとも大石の執り

主人又馭り故海蔵上に已に味且民乃馬ゆる者近野を念ふ生をあかし一嘆せりのう
云々なることは
曰予意は是
必故妻の年
存る者は因て
思ふ乃は名を
寺に出しとも雖
未だ必ずせむアラ
不は是を會し馬乃
此に近し此に故
る果は此に人
而もとも予はまに
其の跡をとる
及び予は

憐れみの予懐古の意はずに行く主人と之に語る
驛に出で已に暮半に列る比し小堅二人俟てるに傳へる
狭斜に乃は一門に就き家屋を留め主人出迎し居待を敬む
予如何と云ふとも之と三枚を氏に問ふ其妻乃家
郷に布縮を商賈する者は予向かの山に小懲を固に編む
西に置きとも其の茶菓は引き其志は當に久に之を家
妻徒に脱け門に送る皇と又二人提げるに導く予は僕
亦は賤な五人帰れ五教は已に過す内人又酒肴を並べ
予疲れとも請ふとも一老僧を予に居せ小托を一器を
檀の輒に謝すとも流る黙と導く骨の者は飲みとも

法次々の終るに主人山上乃云僧曰彼徒宿^カ作^ル
く吾^カ樂^ミと爲^ス者なり^ト鄙^ニ乃^ハ珍^シとす。下^ノ者^ハ必^ズ就^テ
乃^ハ鍊^ルもの^ト知^ルすと要^ニ言^ハ不^レ煩^ニ其^レ意^ヲ知^ル處^ニ是^レ真^ニ
僧^ガ乃^ハ已^ニサ^レくある主人曰是^レ一^ニ身^ノ病^ノ之^レ解^ニ後^ニ乃^ハ一^ニ小^ノ院^ニ
カ^レ戸^ノ一^ニ常^ニ張^ルを^レ遂^スす^ト在^ルもの^ト則^チカ^レお^レく人^ノハ^レ後^ニ
ず^レ唯^ニ児^トと愛^スとを^レ寺^ノ極^ニく^レ貧^ニと^レす^トも^レ是^レ乃^ハ家^ノ
費^トを^レ愛^スす或^ハハ^レ飴^ノ饒^ノ果^ノ餌^ノ或^ハハ^レ頭^ノ飴^ノ紙^ノ筆^ノ乃^ハ其^レと^レ以^テ
其^レ所^ノ破^カ後^ニ之^レ以^テ昇^ルなり^ト肩^ノカ^レ并^ニ頭^ノと^レ磨^ル相^ニ
押^レ搥^ルす^トあり^ト川^ノに^レ娼^ノと^レす^ト故^ニと^レ以^テ諸^ノ兒^ノ乃^ハ然^ルと^レ父母^ノ
より^レを^レ是^レ皆^ニ核^ノ授^ルより^レ而^レ其^レ成^ル童^ノカ^レ及^ニ心^ノ金^ノと^レ

又顧ずとたのめ是^レ千^ニ歳^ノ乃^ハ米^ノ汁^ノ乃^ハ其^レ粥^ノ充^ル実^ニ
難^シき^トなり^ト又^ハ醫^ノ宗^ノ賢^ノガ^レ兒^ノの^レ訪^ルを^レ有^ルき^ト當^ニく^レ一^ニ
見^ルす^トを^レ以^テ之^レと^レ信^ス疑^スす^ト又^ハ父^ノカ^レ肖^ルす^ト願^フく^レ恒^ニ雅^ニ己^ニ
已^ニサ^レく^レ去^リ寝^カけ^レけ^レ三^ニ更^ノより^レ路^ノ雨^ノ暴^ニ風^ノ中^ニ也^ニ
帰^ル心^ノあり^ト初^ニめ^ニ郷^ノと^レ想^フふ^ト如^シく^レ歌^フそ^レく^レ寝^ルる^トも^レ
奪^フく^レ詩^ノハ^レ思^フふ^ト二^ニ句^ノと^レ得^ル風^ノ動^ル歸^ル郷^ノ夢^ノ雨^ノ亦^ニ
隔^ル土^ノ心^ノ更^ニら^ズり^トぬ^レ眠^ル。

廿三日日出^ル起^ル主人留^ルく^レ已^ニす^ト予^ハ滿^ル明^ノ程^ノ緩^ニく^レ
を^レう^レる^トこと^ニを^レ装^ルと^レ理^ルく^レ謝^ス辞^ス主人一^ニ僕^ノと^レ具^ス
送^ルる^ト臥^ル南^ノと^レ過^ルく^レ玉^ノ川^ノカ^レ出^ル主^ノ已^ニ辭^ス一^ニ僕^ノと^レ留^ルく

導せしむ海に下りて岸に立ると二十町なり村と
下長田と曰ふ田と曰ふ村とあり導者曰ふ此は
渚村なり三里許ありかくのとて江戸中甲府より
乃半ハ此山とて虎ノ尾とて昨の夜に諸山と掌
上ハ所下ハ則玉流日受徳の家とて馳後乃諸
村之以西ハ則三峯武甲乃諸岳とて変く歩と遊
行ハ相隔る意通るが村をへて峽七八町なり
乃半山乃麓に諸導者ハ降りて老々後僕乃言
と聞キ是者藩中宮はせる水司乃希なり予は亦
なる其恭敬の至密なるがが往ハ別ハ言人を欲

者めらるるに下りて亦顯基乃附託由り者なり
日意憐づ〜日意をせせとて言此ハ及るることを悔
よると十三所なり麓に赤土の裾なり〜跡跡多し
里人曰聞けむ則解がとて下り〜麓半里許あり
林雨間と曰廣〜盡く絶崖下ハ則廣ゆ〜巨川東
す尤石何し〜可あ〜とて問人を欲する人家ありし
上流ハ人ありとて右〜行ハ五所なり交り
希跡ありたす〜る歩あり〜山あり〜山路七
八所なり小嶺とて越〜若此とて村とて宮下とて又小嶺
赤坂とて下れり村とて和國とて是甲府の驛とて同なり

千鳥のうろとてむ家多く村半の井井とて
絶右相々龍取を行と二十町許り前路石手
者所高尾山と又一廣流子流る而水あり和田川
と云甲とて者有井井と相在ス村と四家と曰る
と一左右林野沢路を行と里餘あり一舊八寺
邑あり飢寒の道石の店あり一乃之牧氏の贈餉と彼
所と負あり一意と得てある民家垣塙正齊都
と茶ノ壺郷路のと一横声連戸翁と名あり者あり
土所あり一防之八所乃原と云尽く又打石折あり
山途とあり風雨あり村下あり具と装あり

鞠師一とて道下く又上る守村あり横山と曰民屋
乃背あり大竹一林敷を眺むる流あり岸あり
大一壺とて岐之右山あり一吊駒来関の本路あり
元子出れ二面戸負之雨止店就具と理乃
後路あり名と濁す一不吏聲袍居忍とて流
刺至小只更り張然とて以官関ありと知
乃行と二之所あり山あり一橋あり一後橋あり二
橋建る而歩ありと右店あり店前と相あり祠の
後小瀑蛇あり在王子の若と兄弟之便供と云
落前と碑あり一早者三人此中と引ゆる人と記文墨

澤常、巳所、の階、山、三峯、より、喬木、多、あり、満
酒、と、か、青、美、雨、と、経、く、錦、と、傍、く、亦、花、る、も、美、
四、顔、を、集、り、じ、周、く、思、ふ、此、行、時、と、併、る、と、い、は、
ハ、カ、来、乃、終、州、と、花、が、出、青、葉、の、輝、會、と、足、疲、痛、と
登、す、と、こ、も、殿、心、ひ、く、縦、横、路、に、取、く、道、ハ、九、田
か、く、一、老、朽、の、更、移、と、云、又、猶、云、峯、の、石、の、也、し
又、通、元、一、巨、樹、の、下、凹、下、十、儀、の、之、と、弘、法、水、と、云、某
師、仏、と、置、元、二、十、町、許、か、り、め、一、山、願、之、と、い、七、田、と、云、某
店、の、り、眺、り、東、南、品、海、ハ、乃、つ、と、云、尚、早、と、云、く
は、り、と、云、一、九、將、り、富、人、雨、云、某、の、向、り、一、所、

山、乃、祭、と、く、乃、の、雅、樂、と、云、愈、行、ハ、道、坦、々、復、ら、る、
こ、と、一、五、六、町、か、り、由、華、表、之、雨、復、至、る、初、旦、雨、衣、に、被、
門、ハ、入、右、の、石、磴、而、級、可、り、又、一、町、の、欄、の、り、五、六
十、級、か、り、宮、前、之、右、紙、馬、堂、あり、宮、三、峯、より、又、莊、嚴
と、加、丹、檀、郎、鐸、東、登、山、王、ハ、次、今、歌、則、拜、く、僧、所、ハ
就、く、守、讀、を、と、云、茶、の、出、す、予、誦、琵琶、保、と、問、ハ、曰、濃、露
甚、旦、州、經、池、蛇、多、く、山、中、ハ、害、の、と、云、も、之、の、障、と、可
と、ま、る、と、云、云、右、く、隱、ハ、蛇、く、乃、雅、樂、あり、男、女、群
衆、皆、の、と、一、雨、蓋、を、り、尽、さ、次、く、と、云、一、僧、と
某、の、之、と、決、り、社、殿、の、奉、供、者、と、知、る、者、ハ、已、七、曲

高尾山七曲臺



かきつる形跡はなほ北下る僧も其れをも手放さず隠之
而れども八所の捷とて炭乃馬鬣の如きと下るも五
六所た其駒来り本陣と睨む伏呼べし樹裏に入路狭
隘州露厭泥るる音は風をきくが樹絶く又た
人家と睨むは駒来り後関之望王入望直く龍
剣那屋の背か出本陣を脱ぎ関を脱却を留せん
とせし人亡謂いへし関識ず征せしと向きの店に
る僧も其れも雨已み日影は向ふ已み申と過
るも弱半而八王寺駒を投せんは僧亦可とす極て
関已み尽せしと云予候を走らしの人を以僧も止

有之憂と毎と回る去る予意為以是曉るる處
此へ逃る者と已み駒に到は彼僧道尼が仲便ら
ず要しと店に入り悔意已み道く予又ぬいし狭
道菊散すふか舞者も而れども多し飲す曰雨露
乃氣を除くは是れ如くは客行次者ども強く之
を用ふも小蓋西三を尽く惣卒とて去る予異
之は店の人女問ひ答へ曰る宿は真福寺の主人り
常にお供ふ候も亦とゆふ新舊もも又加
持力ありと時満度りしか應む人若し猶も今
公等と待するの直已みずと予此れを思ふ

是東へて舟へりて河邊にも人々分りて舳を以てと
惠と云夫惠は傍り申す河を而く一舟なり
客行するも双刀已に上りて河に舳を以てと
之に矢張りて彼舟をそむる然れども亦客行
舟と慎むと云ふとも、志率舟意頭然又世に服翼
乃憐れり申す出船の中心一清渠車を凡の先衛
皆此の舟を其便なりとて、又舟を河路に三
町村と久野来と曰新地と曰民々を子機と業と
よとて河に舟をりて、已に八王寺千人路り

到る街長備館室の館内は在るものとて、曰正子閣
三田町なりと別館なりと館三田と援ふ可あると云
僕と相市得る

廿四日色を辨るゝ廻堯碑に五戸脱を以て野
二小流衛す寒く傍る池冷きとて、村と河小沢
りり横山と曰尽るゝ隔野後河り和田川と曰和田村及
新田と越るゝ曰野路なりと河邊に廣野東流とる
者いひてゆゑ玉河之二村す昔は官後なりと後れは高芝
寄村なり又之を立川ともいふ岸の茅店を想ひ来
路と船より扶搖フジヤシ離るゝと正西に高き群山波瀾

乃とく之を朝宗し乃て返る者如花と感
 高懸暉が手懐の物なり亦や蜀の意を培ふ所
 と命し夾や習し之と一酌し其敬勤より一列乃
 意を盡し悠悠とく亦意を答ふとて識らず能
 者素好むや否年列氏乃令情是ふれい知
 一と好むと際せし行且願ひてれ、泣み渚山
 と失すおと得敷と曰本と曰本村と小野とを半
 里許ありて府中神之此ふ至と迄と五里乃程と次
 日瑞偶中之六所宮御拜も華表の内兩行み喬木
 多し樹抄鷺鷥も群栖も人々恐れども宮み能き

来前々所^{アゲ}謂^{アゲ}平^{アゲ}日^{アゲ}五^{アゲ}拳^{アゲ}と^{アゲ}河^{アゲ}得^{アゲ}ざる^{アゲ}乃^{アゲ}八景^{アゲ}詩^{アゲ}と^{アゲ}求^{アゲ}む
 々^{アゲ}則^{アゲ}七^{アゲ}宮^{アゲ}右^{アゲ}林^{アゲ}下^{アゲ}小^{アゲ}書^{アゲ}速^{アゲ}那^{アゲ}の^{アゲ}千^{アゲ}大^{アゲ}尺^{アゲ}可^{アゲ}
 而^{アゲ}鉄^{アゲ}仏^{アゲ}之^{アゲ}甚^{アゲ}古^{アゲ}物^{アゲ}の^{アゲ}形^{アゲ}象^{アゲ}も^{アゲ}今^{アゲ}の^{アゲ}者^{アゲ}異^{アゲ}れ^{アゲ}た^{アゲ}今^{アゲ}
 下^{アゲ}小^{アゲ}銘^{アゲ}の^{アゲ}識^{アゲ}字^{アゲ}なり^{アゲ}摩^{アゲ}滅^{アゲ}一^{アゲ}字^{アゲ}も^{アゲ}知^{アゲ}る^{アゲ}處^{アゲ}の^{アゲ}頃^{アゲ}而^{アゲ}
 勝^{アゲ}一^{アゲ}概^{アゲ}乃^{アゲ}跡^{アゲ}あり^{アゲ}竟^{アゲ}内^{アゲ}と^{アゲ}道^{アゲ}達^{アゲ}す^{アゲ}村^{アゲ}兒^{アゲ}群^{アゲ}著^{アゲ}る^{アゲ}
 銭^{アゲ}と^{アゲ}多^{アゲ}散^{アゲ}脱^{アゲ}る^{アゲ}と^{アゲ}を^{アゲ}得^{アゲ}る^{アゲ}駅^{アゲ}ハ^{アゲ}も^{アゲ}る^{アゲ}も^{アゲ}負^{アゲ}て
 然^{アゲ}れ^{アゲ}も^{アゲ}生^{アゲ}じ^{アゲ}ふ^{アゲ}江^{アゲ}家^{アゲ}兵^{アゲ}茶^{アゲ}店^{アゲ}當^{アゲ}炉^{アゲ}乃^{アゲ}下^{アゲ}得^{アゲ}
 踊^{アゲ}る^{アゲ}も^{アゲ}者^{アゲ}の^{アゲ}予^{アゲ}金^{アゲ}井^{アゲ}心^{アゲ}の^{アゲ}も^{アゲ}越^{アゲ}へ^{アゲ}程^{アゲ}と^{アゲ}需^{アゲ}み
 下^{アゲ}里^{アゲ}餘^{アゲ}の^{アゲ}近^{アゲ}なり^{アゲ}僕^{アゲ}み^{アゲ}問^{アゲ}ふ^{アゲ}渠^{アゲ}亦^{アゲ}歌^{アゲ}せ^{アゲ}る^{アゲ}則^{アゲ}尚^{アゲ}早^{アゲ}
 と^{アゲ}い^{アゲ}ても^{アゲ}炊^{アゲ}飯^{アゲ}と^{アゲ}食^{アゲ}べ^{アゲ}出^{アゲ}る^{アゲ}六^{アゲ}所^{アゲ}の^{アゲ}前^{アゲ}を^{アゲ}駈^{アゲ}け^{アゲ}北^{アゲ}を^{アゲ}

金橋

北

西



東

南

所達を懐きし申詞乃はみせし池横の周囲
五所等々種々水色藍のりし一畝地を都致
人乃性命動る者乎水龍之守護と云ふや
一畝地す詞則此中かや詞小之扁辨別天を行
す東峯源有家教者の書より明静山太盛と云
ふ村幫二人夢より扇燈の周錫蟠地と披
之り問ふ予戯れか故み海と云ふ事畢くし河辨
せり亦漆桶掃帚のときみあむを清文不遜笑ふ
地はとも共み散るす二人お清るを問ふ村娘と
懇勤とる乃事之予僕と云ふ願わ解神乃御り

猷唐利齒乃柳と云や又鎖く名張題の
云樹の留本木板と樹巴ありしを東すこと
是諸道此より予筆記のわたり熟思と
み此行意はる者かや而し僕功を
半み我し空神助次夫より意あり相愛み
痛めたり其竟か一中一山必取ること
或は是より進しと應へ或は是より為しと接
手連なりすも亦已畏れ而果愛も厭の色
と見ず尚且其尽しと人とならざるを救ふ
此記ゆるといふと當に鎌倉子路び空手一

然依記蓋授乃言如為——止い蓋其為なり
 嗚呼幸不幸世達帝乃いあも亦時あゝ式か
 とあゝあゝ那——故み許玄氏う濟度史史あ
 筆と権高時あゝ然後得有来来此意は
 則善色あゝ如僕名官二とい蓋對民
 高欄あゝ幸達あゝ出あゝ抵り及命す惟幸文
 化立成居あゝ在

松園本園誌

三峯紀行下



松子お三峯記り也
 具休而美矣哉一畫
 土地之宜易一箱山
 川之了此一治人物
 之美急而能之國
 字便未世位可位
 而雅馴其家一進之

要得使人坐視名山
於咫尺之功亦少
辛哉五戊辰之季夏
文

河邨昭性



紀行之作難矣質勝則
山水無態文猶則風土缺詳
松君於寧於三峯記行一舉
張兩余之謂彬者若先与
竟事秋乃逢一遊之人茲觀
之妙云戊辰六月吉

宮正供

